

# 「学校教育体験実習Ⅰ・Ⅱ」に関する実践研究

～教育実習の事前・事後体験教育の検討～

小澤 熹\*・山崎 祥子\*・岩見 禎二\*  
崎野三太郎\*・吉田裕美子\*

The Practical Study on “school education experience practice I・II”  
- Examination of pre - and post - education experience of teaching practice -

Hiroshi OZAWA\*・Shoko YAMAZAKI\*・Teiji IWAMI\*  
Santaro SAKINO\*・Yumiko YOSHIDA\*

Key words : 教員養成機能	Teacher training function
学校教育体験実習	School education experience
6 類型 30 設問調査	6type 30 question survey
因子分析	Factor analysis
相関係数	Correlation coefficient

## [1] はじめに

教員養成機能を充実・強化するためには、学校現場でのより多くの体験と学びが必要であろう。本学では、そのために小学校教育体験実習を必修として単位化し、教員養成に取り組んでいる。

これは本学学生が「教育実習」をより効果的に行うための実践的事前学習と「教育実習」後の総括・補足活動として、教職に就く場合の課題の確認と実践力形成基盤の強化を図るためのものである。このような養成機能の充実強化には地域社会との協働が不可欠である。

そのために、地域社会と本学双方の教育活動の活性化等を実現するため、「東北女子大学と弘前市教育委員会との連携に関する協定」を締結する運びとなった。このことによって、市内各小学校で実施される本学学生の「教育実習」や「学校教育体験実習」の受け入れと同時に、高齢化の進んでいる学校現場へは本学学生の若さがもたらす児童への教育的影響力等を提供するという、双方にとって有益な協力関係がより高い成果をあげ得ることとなった。

こうした教育協力のあり方は、一地域一大学だけの教育、教員養成方式に止まるものではなく、わが国教員養成の発展充実の追求とも軌を一にするものと考えている。

したがって本研究では、こうした本学の取り組みに関して、その実施経緯と各受け入れ校における学生の体験実習に関わる「評価アンケート」を分析・検討した内容を一つの実践研究として、その手法・成果を世に問うこととした。そこで、本研究内容を平成 25 年 9 月 15・16 日開催の日本教師教育学会第 23 回研究大会で発表するとともに、それに加筆修正して研究論文にまとめたものが本稿である。

## [2] 学校教育体験実習に至る経緯

### 2-1 経緯のアウトライン

○本学では、従前から、教育実習事前指導の一環として、3 年次に教育実習協力校 2 校での授業参観を中心とする観察実習、4 年次には、僻地複式校 2 校での観察実習及び交流活動<ふれあい集会>を行ってきていた。

○平成 19 年度に、関東圏合格者の学生から「このまま教育現場に入っていくのには不安があ

\*東北女子大学

る。もっと学校のこと、教師の仕事のこと、児童のことを知りたいので学びの機会を設けてほしい。」との要望があり、希望者の当該実習協力校にお願いし、実施することになった。

- 20年、21年度と希望者が増し、全ての教育実習校に依頼する形で実施してきた。実施形態は、大学の空き時間を利用して、学生が受け入れ校に出向き、学校行事への参加・手伝い、授業参観、児童との活動、個別指導等授業の補助、校内環境整備等、教員の担当業務を手伝いながら体験を積むというものであった。
- 平成22年度、教員養成機能をより充実させるためには、制度化する必要があることから、市教育委員会とも連携し、後期時間割表に週1回火曜日全日をスクールサポーター（学校教育体験実習）としてカリキュラムに位置づけ、全教育実習協力校（13校）に実習生全員（42名）が参加する形で実施した。
- 平成23年度、前、後期共カリキュラムに位置づけ（前・後期火曜日全日）小学校教員免許取得希望者全員に学校教育体験実習Ⅰ（前期）Ⅱ（後期）を実施。
- 平成24年2月27日、市教育委員会と本学が、「これまで以上に幅広くかつきめ細やかで柔軟な連携協力を推進し、地域の教育課題に適切に対応し、調和のとれた人間性豊かな児童生徒の育成をはじめ、弘前市における教育の充実・発展及び教員養成に寄与する必要がある」との合意に至り、協定を締結。
- 平成24年度、「学校教育体験実習Ⅰ」前期1単位、「学校教育体験実習Ⅱ」後期1単位の単位制として実施することになった。

### [3] 学校教育体験実習の内容・運営方式

#### 3-1 教育課程への位置づけ

- 家政学部 児童学科 教職に関する科目  
教育実習（小）4単位  
事前事後指導（小）1単位  
学校教育体験実習Ⅰ（小）1単位  
学校教育体験実習Ⅱ（小）1単位

#### 3-2 ねらい

～実践的指導力に富み、心豊かで、  
たくましい教員の育成を目指して～

小学校現場での、学校教育活動の体験を通して、児童、学級、学校の1日・1年間の様子を学び、小学校教員・学級担任として必要なことの基礎を理解し、それを教育実習に生かすとともに、将来の教育実践につなげることとした。

##### ○教育体験実習Ⅰ

教育実習の準備段階として、児童理解、学級経営、学習指導等の基礎的基本的事項についての体験的な学習

##### ○教育体験実習Ⅱ

教育実習終了後に教員の役割、責任、喜び課題等を実感、再確認し、教育活動に対する総合的資質能力の向上を図る。

#### 3-3 期間及び回数

##### ○学校教育体験実習Ⅰ

5月～7月（全10回 週1回 火曜日）

##### ○学校教育体験実習Ⅱ

10月～12月（全10回 週1回 金曜日）

○学校の要請による体験実習（学校行事の手伝い他）については個々に話し合う。

#### 3-4 学校教育体験実習への参加資格

##### ○認定制

・小学校教員免許取得予定者で教職に熱意のある者

##### ○認定の方法及び事前の指導

・4月・・・資格認定会議 事前指導

・7月末・・・「学校教育体験実習Ⅰ」についての評価の低い学生に対する指導  
→「教育実習」へ

・9月末・・・「教育実習の評価」評価の低い学生に対する指導→「学校教育体験実習Ⅱ」へ

##### ○「出勤簿」「活動記録簿」

○「学校教育体験実習で学んだこと・教職に対する思い」

#### [4] 教育体験実習に関する調査アンケートⅠとⅡの構成内容

4-1 アンケートの実施時期、調査対象、作成等

○学校教育体験実習Ⅰアンケートの実施：平成24年8月16～21日

○学校教育体験実習Ⅱアンケートの実施：平成25年1月8・9日

○調査対象：平成24年度小学児童学科

4年生：小学校教員養成課程履修者41名

○本調査アンケートⅠ・Ⅱの作製：本研究会が行ったスクール・サポーター時の活動実態調査及び会員の教員養成に関する経験と知見を総合して考案作製した。

なお、本アンケート（調査質問紙）は、6類型30設問で構成されているもので、Thojo・Oyiy式（6類型30設問型調査紙）と命名して、平成25年度日本教師教育学会第23回研究大会において、研究内容と共に公表してある。

\* Thojoは東北女子大学、Oyiyは小澤・山崎・

岩見・吉田のイニシャルである。

4-2 アンケートⅠ・Ⅱの構成内容は、以下に示した表Ⅰ及び表Ⅱの通りである。

○本調査アンケートⅠとⅡで異なる設問項目は、Ⅵ類型：（教職・教育実習に対する意識変化と志向性）に属するV28。目標とする教師像を明確にすることができた。

V29. 教職に対する自信がついた。

V30. 学校教育体験実習Ⅱは、大学における実践的教員養成教育を深め、教員の質向上に有益であると思う、の3設問だけで、あとは同じ設問で構成されている。

[5] 6類型30項目アンケートの因子分析にみられる特徴

5-1 学校教育体験実習Ⅰの設問項目の因子分析

表Ⅰ 学校教育体験実習Ⅰ（平成24年度）アンケート 配布・回収日 平成24年8月16日～21日

実習校名 担当学年、学級 担当児童数  
 実習期間 5月15日（火）～7月17日（火）  
 取得を目指している免許状すべてに○をつけてください。 1. 小学校教諭 2. 幼稚園教諭 3. 保育士  
 下記の設問項目について、この体験実習において、どの程度あてはまるか、5～1（5段階評価）を○で囲んで下さい。

設問文	5 大いにあてはまる	4 まああてはまる	3 どちらでもない	2 あまりあてはまらない	1 全くあてはまらない
<b>I. 学校生活等の流れや教職員とのコミュニケーション</b>					
1 学校生活の一日の流れをつかむことができた	5	4	3	2	1
2 教師がやっている一日の仕事・勤務状況がつかめた	5	4	3	2	1
3 子どもたちの一日の学習活動・状況がつかめた	5	4	3	2	1
4 学級担任、実習担当教員以外の先生方とのコミュニケーションができた	5	4	3	2	1
5 報告・連絡・相談の大切さを知った	5	4	3	2	1
<b>II. 児童についての理解と実際の対応について</b>					
6 担当クラスの様子、実態を理解することができた	5	4	3	2	1
7 児童の名前と一人一人の特徴をつかむことができた	5	4	3	2	1
8 児童は教師の特徴・態度等をよく観察していると思った	5	4	3	2	1
9 児童一人一人への教師の対応方法を学ぶことができた	5	4	3	2	1
10 学級づくりになんが大切かを学ぶことができた	5	4	3	2	1
<b>III. 授業と関わる実際の観察等について</b>					
11 授業展開の進め方、あり方を観察することができた	5	4	3	2	1
12 教材の工夫・使い方を学んだ	5	4	3	2	1
13 児童の興味関心を高める声かけの仕方を学んだ	5	4	3	2	1
14 児童が発言しやすい発問のあり方を学んだ	5	4	3	2	1
15 授業のメリハリの付け方を学んだ	5	4	3	2	1
<b>IV. 補助・支援活動の内容</b>					
16 プリント、ドリルの丸付け	5	4	3	2	1
17 掲示物の手伝い	5	4	3	2	1
18 清掃活動	5	4	3	2	1
19 机間指導等の授業補助	5	4	3	2	1
20 給食指導の補助	5	4	3	2	1
<b>V. 16のプリント、ドリルの丸付けで気づいたこと</b>					
21 児童の学力の実態を知ることができた	5	4	3	2	1
22 個別指導の必要性を知った	5	4	3	2	1
23 正誤判断の難しさを知った	5	4	3	2	1
24 正誤判断は教師の指導を受けてできた	5	4	3	2	1
25 学年教科の教材の内容・配列を理解できた	5	4	3	2	1
<b>VI. 教職・教育実習に対する意識変化と志向性</b>					
26 教師には授業以外に多くの仕事があることを知った	5	4	3	2	1
27 教師の仕事のやりがいとすばらしさを知り、教師になりたいという気持ちが強くなった	5	4	3	2	1
28 教育実習に対する心構えができた	5	4	3	2	1
29 教育実習をする自信がついた	5	4	3	2	1
30 学校教育体験実習Ⅰは教育実習、教員養成教育にとって有益である	5	4	3	2	1

表一Ⅱ 学校教育体験実習Ⅱ（平成24年度）アンケート 配布・回収日 平成25年1月8日～同25年1月9日

実習校名 担当学年、学級 担当児童数  
 実習期間 10月5日（金）～12月21日（金）  
 取得を目指している免許状すべてに○をつけてください。 1. 小学校教諭 2. 幼稚園教諭 3. 保育士  
 下記の設問項目について、この体験実習において、どの程度あてはまるか、5～1（5段階評価）を○で囲んで下さい。

設問文	5	4	3	2	1
	大いにあてはまる	まああてはまる	どちらでもない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
<b>I. 学校生活等の流れや教職員とのコミュニケーション</b>					
1 学校生活の一日の流れをつかむことができた	5	4	3	2	1
2 教師がやっている一日の仕事・勤務状況がつかめた	5	4	3	2	1
3 子どもたちの一日の学習活動・状況がつかめた	5	4	3	2	1
4 学級担任、実習担当教員以外の先生方とのコミュニケーションができた	5	4	3	2	1
5 報告・連絡・相談の大切さを知った	5	4	3	2	1
<b>Ⅱ. 児童についての理解と実際の対応について</b>					
6 担当クラスの様子、実態を理解することができた	5	4	3	2	1
7 児童の名前と一人一人の特徴をつかむことができた	5	4	3	2	1
8 児童は教師の特徴・態度等をよく観察していると思った	5	4	3	2	1

<b>V. 16のプリント、ドリルの丸付けで気づいたこと</b>					
21 児童の学力の実態を知ることができた	5	4	3	2	1
22 個別指導の必要性を知った	5	4	3	2	1
23 正誤判断の難しさを知った	5	4	3	2	1
24 正誤判断は教師の指導を受けてできた	5	4	3	2	1
25 学年教科の教材の内容・配列を理解できた	5	4	3	2	1
<b>Ⅵ. 教職・教育実習に対する意識変化と志向性</b>					
26 教師には授業以外に多くの仕事があることを知った	5	4	3	2	1
27 教師の仕事のやりがいとすばらしさを知り、教師になりたいという気持ちが強くなった	5	4	3	2	1
28 目標とする教師像を明確にすることができた	5	4	3	2	1
29 教職に対する自信がついた	5	4	3	2	1
30 学校教育体験実習Ⅱは、大学における実践的教員養成教育を深め、教員の資質向上に有益であると思う	5	4	3	2	1

表一Ⅲ：学校教育体験実習Ⅰの7 Factor

* Factor 番号の次の表示数値は固有値である。	
<b>Factor 1 : 3.647</b>	(設問Ⅲ類型：授業と関わる実際の観察等について)
・ V12 0.600	教材の使い方・工夫を学んだ：* V2.10.11.13.14.15 (*は相関係数値0.4以上の設問である。以下同じ)
・ V14 0.974	児童が発言しやすい発問のあり方を学んだ：V10.11.12.13.15.19.28
・ V15 0.669	授業のメリハリの付け方を学んだ：V10.13.14.22.24.
<b>Factor 2 : 2.523</b>	(設問Ⅰ類型：学校生活等の流れや教職員とのコミュニケーション)
・ V1 0.711	学校生活の一日の流れをつかむことができた：V2.23.25.28.29
・ V2 0.781	教師のやっている一日の仕事・勤務状況がつかめた：V15.9.12.25.28.
<b>Factor 3 : 2.433</b>	(設問Ⅵ類型：教職・教育実習に対する意識変化と志向性の後半)
・ V29 0.832	教育実習に対する自信がついた：V1.3.6.19.20
<b>Factor 4 : 2.253</b>	(設問Ⅴ類型：16のプリント、ドリルの丸付けで気づいたこと)
・ V22 0.634	個別指導の必要性を知った：V7.15.26.
<b>Factor 5 : 2.243</b>	(設問Ⅱ類型：児童についての理解と実際の対応について)
・ V8 0.955	児童は教師の特徴・態度をよく観察していると思った：V18
<b>Factor 6 : 1.814</b>	(設問Ⅰ類型：学校生活等の流れや教職員とのコミュニケーション)
・ V5 0.820	報告・連絡・相談の大切さを知った：V2.9.13.17.24.26.
・ V17 0.673	掲示物の手伝い(設問Ⅳ類型：補助・支援活動の内容)：V5
<b>Factor 7 : 1.730</b>	(設問Ⅴ類型：16のプリント、ドリルの丸付けで気づいたこと)
・ V24 0.924	正誤判断は教師の指導を受けてできた：V5.10.15.25.



調査対象者 41 名が 30 設問について、どの程度あてはまるかを 5 段階評価で回答したデータを、R ソフトを使用して因子分析をおこなった。スクリープロット 1 以上を対象とした解析の結果、表-Ⅲに示す 7 Factor が見られたので、各 Factor 内の係数 0.6 以上の設問項目を V 番号で示すことにした。同時に、この設問項目と関連して

いる相関係数 0.4 以上のその他の設問を相関係数表から抽出して、設問項目の後尾に記したのが表-Ⅲである。

5-2 学校教育体験実習Ⅱの設問項目の因子分析  
前述の学校教育体験実習Ⅰの分析と同じ条件・方法で行った。解析の結果、同じく 7 Factor が見られたので、同様に表-Ⅳとして示す。

表-Ⅳ 学校教育体験実習Ⅱの 7 Factor

* Factor 番号の次に示す数値は固有値である。	
<b>Factor 1 : 3.335</b>	(設問Ⅲ類型：授業と関わる実際の観察等について)
・ <u>V11</u> 0.895	授業展開の進め方、あり方を観察することができた：V12.13.14.15.27.
・ V12 0.780	教材の使い方工夫を学んだ：V9.11.13.14.15.
・ V14 0.706	児童が発言しやすい発問のあり方を学んだ：V9.11.12.13.15.20.25
<b>Factor 2 : 2.732</b>	(設問Ⅰ類型：学校生活等の流れや教職員とのコミュニケーション)
・ <u>V 1</u> 0.711	学校生活の一日の流れをつかむことができた：V2.3.7.
・ V 3 0.608	子どもたちの一日の学習活・状況がつかめた：V12.7.15.16.
<b>Factor 3 : 2.286</b>	(設問Ⅱ類型：児童についての理解と実際の対応について)
・ <u>V 7</u> 0.868	児童の名前と一人ひとりの特徴をつかむことができた：V1.3.6.15.
・ V 9 0.608	児童一人ひとりへの教師の対応方法を学ぶことができた：V6.12.13.14.15.20.
<b>Factor 4 : 2.255</b>	(設問Ⅴ類型：16 のプリント、ドリルの丸付けで気づいたこと、 (設問Ⅵ類型：教職・教育実習に対する意識変化と志向性の後半)
・ V24 0.696	正誤判断は教師の指導を受けてできた：V28
・ <u>V28</u> 0.878	目標とする教師像を明確にすることができた：V10.24.26.27.29.
<b>Factor 5 : 2.126</b>	(設問第Ⅵ類型：教職・教育実習に対する意識変化と指向性)
・ <u>V26</u> 0.856	教師には授業以外に多くの仕事があることを知った：V12.13.27.28.
<b>Factor 6 : 1.459</b>	(設問第Ⅵ類型：教職・教育実習に対する意識変化と指向性)
・ <u>V30</u> 0.824	学校教育体験実習Ⅱは、大学における実践的教員養成教育を深め、教員の質的向上に有益であると思う：V27
<b>Factor 7 : 1.404</b>	(設問第Ⅱ類型：児童についての理解と実際の対応について)
・ <u>V10</u> 0.748	学級担任の責任の大きさに (学級の雰囲気・児童の学力など) 気づいた：V13. 28

5-3 設問の内容構成と各項目の相関の意味  
(1) 以上の学校教育体験実習Ⅰ・Ⅱに関わる因子分析の結果から、前掲の表-Ⅲ、表-Ⅳに示したように 7Factor が明確に見られた。しかも設問類型と一致したことから、本調査アンケートの内容構成等の妥当性が実証されたと言える。  
(2) 次に表-Ⅲ、表-Ⅳにみられた各 Factor として浮上した設問項目と、その他 29 の設問が、どう関係しているかをみるために、相関係

数 0.4 以上の設問 V 番号を係数表から抽出して、Factor 内の固有値の大きい設問の後尾に記した。この番号設問が、各 Factor 内の代表的項目と相関度が高いと同時に、その係数値に大きく影響を与えている設問でもある。当然のことではあるが、どのような学びや経験が大きく関係して、そうなっているのかを理解しやすくするために、各表から 3 つの Factor を例にあげて以下に示す。

例えば 前掲 表-Ⅲの Factor 1

「V14 児童が発言しやすい発問のあり方を学んだ」との関係では、V10の「学級づくりに何が大切かを学ぶことができた」、V11の「授業展開の進め方、あり方を観察することができた」、V12の「教材の工夫・使い方を学んだ」、V13の「児童の興味関心を高める声かけの仕方を学んだ」、V15の「授業のメリハリの付け方を学んだ」、V19の「机間指導等の授業補助」、V28の「教育実習に対する心構えができた」が、相関係数値0.4以上の項目であり、下線表示項目の係数値は、0.58～0.66で、より高値のものである。

◇ 相関度の高い項目が意味するもの

学生の意識としては、「V14. 児童が発言しやすい発問のあり方を学んだ」として、高得点を与えているが、この意識、自覚及び能力形成基盤には、前掲下線表示の設問項目の学びや経験が重要な意味を持っていることを認識すべきであろう。そして教員養成サイドでは、このことを自覚し、学生の体験環境を構成をしていく必要がある。

以下に示す5つの事例についても同じことが言える。

表-Ⅲの **Factor 2**

「V2 教師のやっている1日の仕事・勤務状況がつかめた」との関係では、V1、「学校生活の流れをつかむことができた」、V5、「報告・連絡・相談の重要性を知った」、V9、「児童一人一人への教師の対応方法を知った」、V12、「教材の工夫・使い方を学んだ」、V25、「学年教科の教材の内容・配列を理解できた」、V28、「教育実習に対する心構えができた」が、相関係数値0.4以上の項目で、下線表示項目の係数値は、0.46～0.52で、高値のものである。

表-Ⅲの **Factor 3**

「V29 教育実習に対する自信ができた」との関係では、V1、「学校生活の流れをつかむことができた」、V3、「子ども達の1日の学習活動・状況がつかめた」、V6、「担当クラスの様子・実態を理解することができた」、V19、「机間指導の補助等」、V20、「給食指導の補助」が相関係数値0.4以上の

項目で、下線表示項目の係数値は、0.44～0.59で、高値のものである。

次に表-Ⅳの Factor についてみる。

**Factor 1**：「V11. 授業展開の進方、あり方を観察することができた」との関係では、V12の「教材の工夫・使い方を学んだ」、V13の「児童の興味関心を高める声かけの仕方を学んだ」、V14の「児童が発言しやすい発問のあり方を学んだ」、V15の「授業のメリハリの付け方を学んだ」、V27の「教師の仕事のやりがいとすばらしさを知り、教師になりたいという気持ちが強くなった」が、相関係数値0.4以上の項目で、下線表示項目の数値は、0.49～0.67で、より高値のものである。

表-Ⅳの Factor 3：「V9. 児童一人一人への教師の対応方法を学ぶことができた」との関係では、V6、「担当クラスの様子、実態を理解することができた」、V12、「教材の工夫・使い方を学んだ」、V13、「児童の興味関心を高める声かけの仕方を学んだ」、V14、「児童が発言しやすい発問のし方を学んだ」、V15、「授業のメリハリの付け方を学んだ」、V20、「給食指導の補助」が相関係数値0.4以上の項目で、下線表示項目の数値は、0.45～0.47で、やや高値のものである。

表-Ⅳの Factor 4：「V28. 目標とする教師像を明確にすることができた」との関係では、V10、「学級担任の責任の大きさ（学級の雰囲気・児童の学力など）に気づいた」、V24、「正誤判断は教師の指導を受けてできた」、V26、「教師には授業以外に多くの仕事があることを知った」、V27「教師の仕事のやりがいとすばらしさを知り、教師になりたいという気持ちが強くなった」、V29「教職に対する自信がついた」の表示項目すべての相関係数値が0.46～0.69の高値のものとなっており、このような体験・経験の中で目標とする教師像を描き、把握していることが伺える。

[6] アンケート全体の平均値と特徴

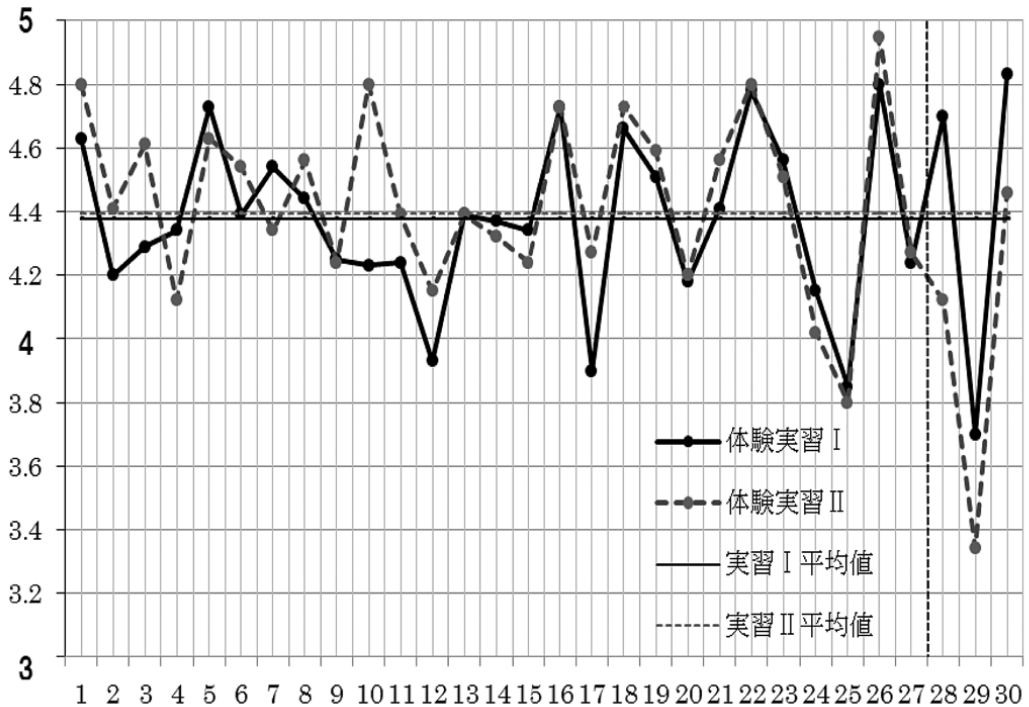
6-1 全体の平均値表：(全41人の30問に対する平均値)

	設問 1	設問 2	設問 3	設問 4	設問 5	設問 6	設問 7	設問 8	設問 9	設問 10	設問 11	設問 12	設問 13
体験実習Ⅰ	4.63	4.2	4.29	4.34	4.73	4.39	4.54	4.44	4.25	4.23	4.24	3.93	4.39
体験実習Ⅱ	4.8	4.41	4.61	4.12	4.63	4.54	4.34	4.56	4.24	4.8	4.39	4.15	4.39
	設問 14	設問 15	設問 16	設問 17	設問 18	設問 19	設問 20	設問 21	設問 22	設問 23	設問 24	設問 25	設問 26
体験実習Ⅰ	4.37	4.34	4.73	3.9	4.66	4.51	4.18	4.41	4.78	4.56	4.15	3.85	4.8
体験実習Ⅱ	4.32	4.24	4.73	4.27	4.73	4.59	4.2	4.56	4.8	4.51	4.02	3.8	4.95
	設問 27	設問 28	設問 29	設問 30									
体験実習Ⅰ	4.24	4.7	3.7	4.83									
体験実習Ⅱ	4.27	4.12	3.34	4.46									

体験実習Ⅰ  
平均値 4.379

体験実習Ⅱ  
平均値 4.395

6-2 全体の平均値グラフ (全41人の30問に対する平均値)



### 6-3 体験実習Ⅰの平均値以上の設問

設問番号 V1. 5. 7. 8. 16. 18. 19. 21. 22.

23. 26. 28. 30

上位8項目の設問番号は以下の通りである。

- ① V30. 学校教育体験実習Ⅰは教育実習、教員養成教育にとって有益である
- ② V26. 教師には授業以外に多くの仕事があることを知った。
- ③ V22. 個別指導の必要性を知った
- ④ V 5. 報告・連絡・相談の大切さを知った  
V16. プリントドリルの丸付け
- ⑥ V28. 教育実習に対する心構えができた  
\* (係数4.47であるが、V 29.教育実習をする自信については、3.7で、その差は約0.77と大きい。)
- ⑦ V16. 清掃活動
- ⑧ V1. 学校生活の1日の流れをつかむことができた・・

### 6-4 体験実習Ⅱの平均値以上の設問

設問番号 V1. 2. 3. 5. 6. 8. 10. 16. 18. 19.

21. 22. 23. 26. 30.

上位8項目番号は以下の通りである。

- ① V26. 教師には授業以外に多くの仕事あることを知った
- ② V 1. 学校生活の1日の流れをつかむことができた  
V10. 学級担任の責任の大きさ(雰囲気・児童の学力など)に気づいた  
V22. 個別指導の必要性知った
- ⑤ V16. プリントドリルの丸付け  
V18. 清掃活動
- ⑥ V5. 報告・連絡・相談の大切さを知った
- ⑦ V3. 子ども達の1日の学習活動・状況がつかめた

### 6-5 体験実習ⅠとⅡの項目間落差の意味

◇ 全平均値: I = 4.379 II = 4.395

II - I = 0.016で、わずかに上回っている。

しかし、設問28.29.30は、IとIIでは異質であるので、これを除く27項目の総平均値差は、0.08と高くなる。またV28.29.30の3設問に限れば、

Iの方が高数値となり、II - I = -0.44差となる。

この3設問の違いを比較するために並列して以下に示しておく。

IのV28.教育実習に対する心構えができた。

IIのV28.目標とする教師像を明確にすることができた。

IのV29.教育実習をする自信がついた。

IIのV29.教職に対する自信がついた。

IのV30.学校教育体験実習Ⅰは、教育実習、教員養成教育にとって有益である。

IIのV30.学校教育体験実習Ⅱは、大学における実践的教員養成教育を深め、教員の質向上に有益であると思う。

いずれもIIの項目係数値が低く、しかもその落差も大きいことは、前掲の曲線グラフと数値差からも明らかである。両者を単純に比較できないことも当然であるが、このように落差が大きく出ていることは、視点を変えてみれば、回答者が、設問内容の質や実現の困難度等を正確に読み取っている結果ともいえる。

◇体験実習ⅡとⅠの同設問間落差の検討

設問別 IIでⅠの設問を上回っている項目

設問 V1, 2, 3, 6, 8, 10, 11, 12, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 26, 27, の16設問である。

\* 設問V13, 16はⅠと同数値である。

◇設問別ⅡでⅠを下回っている項目は

V4, 5, 7, 9, 14, 15, 23, 24, 25 の9設問である。

\* 番号に下線のある項目は、

II - I < 0 の差が大きい設問である。

◇体験実習ⅡでⅠを上回っている設問の検討

\* (IIで評価を高めた人数の多い設問項の調査結果とも一致している)

数値差が大きく、評価を高めた人数も多い主要設問は、

V2. 教師のやっている1日の仕事・勤務状況がつかめた

V3. 子ども達の1日の学習活動・状況がつかめた

V6. 担当クラスの様子、実態を理解することができた

V10. 学級担任の責任の大きさ(学級の雰囲気・



児童の学力など)に気づいた

V11. 授業展開の進め方・あり方を観察することができた

V12. 教材の工夫・使い方を学んだ

\* V17. 掲示物の手伝い

\* V18. 清掃活動

\* V19. 机間指導等の授業補助。

( \*項目は主体的判断能力等が必要な分野であり、学生の能力成長が、受け入れ校側に認められた結果と解釈される。)

V21. 児童の学力の実態を知ることができた

V22. 個別指導の必要性を知った

V26. 教師には授業以外に多くの仕事があることを知った

V27. 教師の仕事のやりがいとすばらしさを知り、教師になりたいと云う気持ちが強くなったの設問である。

◇体験実習ⅡでⅠを下回っている設問の検討  
設問別 ⅡでⅠを下回っている設問番号は、  
V4, 5, 7, 9, 14, 15, 23, 24, 25, である。

この各設問は、体験実習Ⅱの時点において、Ⅰの体験時よりも、評価を低めた人数の多い設問項目を調べた結果とも一致している。\*番号に下線のある項目は、Ⅱ - Ⅰ < 0 の差が大きい設問である。

V4. 学級担任・実習担当以外の先生方とのコミュニケーションができた

V5. 報告・連絡・相談の大切さを知った。

V7. 児童の名前と一人ひとりの特徴をつかむことができた

V15. 授業のメリハリの付け方を学んだ。

V24. 正誤判断は教師の指導を受けてできた。

◇体験実習ⅠとⅡの同一設問間の落差が意味するもの

全体の平均値は体験実習Ⅱの方が高いが、その理由として、以下のことが考えられる。

- (1) 体験実習Ⅰ当時より能力が高まったこと
- (2) 特に体験実習Ⅰと教育実習の経験と学習が、Ⅰ当時とは異なる設問項目へ関心を変化させたと思われる。すなわち、さらに学ぶべき項

目への気づきが大きくなったと言える。

(3) 相違及び能力獲得の特徴点は、平均値比較と既述コメントからも理解されると思うが、その1つは全体を俯瞰し、構造的にものごとを捉えようとする設問が上位にきていることが分かる。

これらの意味することは、学校教育活動における個々の行為の関係性を把握する観察能力等が高かまってきたと言えよう。

また、関心事が、より本質的、基盤的な設問項目へ傾斜してきていることがみられる。したがって、体験実習Ⅱでは、設問項目評価の相転移が起動しつつあるとみられる。すなわち、体験と学びの質的転換への始動が伺えるのである。

このような学びの傾斜傾向こそ、本学における教員養成教育が目指し見据えて行く方向でもあると考えている。

## [7] 自由記述内容に関する考察

### 7-1 学校教育体験実習Ⅰの記述

全体の40%の回答者が記述しているその代表的ものを以下に示す。

○「子どもたちのやさしさに触れ、体験実習は感動の連続でした。担任の先生も母のような優しさと教職への強い情熱をもった先生で、私の理想の先生です。教育実習では先生の指導をたくさん吸収し、頑張りたいです。」

○児童の名前や特徴を覚えることができたし、児童・担任の先生とたくさんコミュニケーションをとれたので、授業以外の不安をかなり取り除くことができ、教育実習に自信をもって入っていけそうだ。」

★「授業の様子を知るために、机間巡視等子どもと関わる活動を多くしたかったが、印刷の手伝いや丸つけ等が多かった」

等、嬉しさや感動の記述がほとんどであったが、中には大学と実習校に対する要望や不満★もみられた。全体的にⅠ類型の「学校生活の流れや教職員とのコミュニケーション」、Ⅱ類型の「児童に

ついで「理解と実際の対応」についての記述が多かった。また、小学校教諭への就職を希望している学生にかぎってみると、Ⅵ類型の「教職・教育実習に対する意識変化と志向性」に関わる記述が相当多くみられた。

### 7-2 学校教育体験実習Ⅱの記述

学校教育体験実習Ⅱでは、全体の約90%の回答者が記述している。その代表的ものを以下に示す。

- 「様々な学年・学級を体験できて勉強になったし、学校行事に参加させてもらい良かったということ。」
- 「控室がなく職員室で、いろんな先生からエピソードを聞いたこと」
- 「特別支援学級での子どもとの関わり」
- 「保健室登校の児童との関わり」
- 「様々な学年・学級に入っの補助や手伝いが主だったので、新たな学びも多々ありました。同時に『自分はまだまだ未熟だ』ということを感じ知るよい機会になりました。」
- 「担任の先生が子どもたちへの対応やいろいろな仕事を任せてくれて嬉しかった。」等、特別支援や個別指導のあり方、個性への対応等を学んだり、また、自分の学級だけでなく各学年、各学級の授業参観を通して、教師の多様な教え方・人間性に触れ得たこと、教育活動で判断を任された時の喜びや責任の重さ等々、教職員や子どもたちとの密接な関わりが進むにつれて、教職に関する深みある発見と教師を目指す者の反省的記述も多くみられた。

### [8] 今後の課題：おわりにかえて

小学校教員免許取得予定者で、一般企業への就

職に変更した学生からは、4年生後期に実施される学校教育体験実習Ⅱは、「就活や試験勉強をするために、選択制にした方がいい」という声もあった半面、「教員にはならないが一年間を通して子どもたちと関わったこと、担任の先生から学んだことは教職に限らず、社会へ出るうえで必ず役立つことだと思う。教育実習・学校教育体験実習へ行く機会を与えてくださり本当にありがとうございました。」という声もあったことから、学校教育体験実習Ⅱを選択制にするかどうかは、今後の検討課題の一つとなろう。

しかし、市教育委員会との協力協定の理念にも見られるように、学校教育体験実習は、単に教師養成教育の充実手段として実施されているだけではなく、地域の学校教育活動の充実と活性化にも貢献するという面を切り捨ててはならないと思う。すなわち「これまで以上に幅広くかつきめ細やかで柔軟な連携協力を推進し、地域の教育課題に適切に対応し、調和のとれた人間性豊かな児童生徒の育成をはじめ、弘前市における教育の充実・発展及び教員養成に寄与する必要がある」ことの認識を再確認して判断すべきである。

さらに本研究の充実発展を目指すための課題として、今後は受け入れ校の校長・教員等に対するアンケート調査を実施し、体験実習学生に対するアンケート調査等との比較研究の中から、より有効な教員養成教育の方法等を見出し、それを応用した実践にまでもっていくことである。

謝辞 この実践研究に関わった方々、特にPC操作の困難な図表作成等に高い技能を提供していただいた事務のMSさんに感謝の意を表します。

平成25年11月16日